この一點では、流石に誠實な法師も誤解に陷つたものと思はれる。

玄奘法師の旅行記が如何に正確であつても、それさへあればバーミヤーンの佛蹟を訪ふ考古學者が何等の困難にも遭遇しないかと云ふに、中々さうはゆかない。人間といふものは兎角物事を誤り易く、又書いた物でも事情の變るに從ひ正當でないと云ふことになり易いもので、色々厄介なことが起つて來る。例へば鑛泉の湯垢に染んで灰色になつた岩石脈の頭部が奇怪な形で露出してゐる處を見て、あれが西域記に出てゐる「長さ一千尺の佛陀涅槃の像」だと思つた者があるが、實際それを遠方から眺めると吾々も矢張りあれだと思ひ度くなる。ところが、此の場合には事實上「町の西方十二三里の地に……」と讀むべきもので「城東二三里」と讀んではいけない。勿論かういふやうに原文を訂正することには如何なる言語學者も同意しない所であらうが、現地の狀況が事實さうであるから已むを得ない。歷史的に考察しても、此の判定を有力ならしめる理由がある。即ち、町の西方十二三里の地には、南面して長さ三百米突、佛陀涅槃の像と同じやうな自然像(今でもカシュミール Kashmir で人